

文学史上の『紫式部日記』『紫式部集』

横 井 孝

一 はじめに

『紫式部日記』と『紫式部集』は、掛け値なしに文学史上において格別の扱いがされている。なにせともに『源氏物語』作者による作品だからである。もとより文学史を形成するためには、その基盤としての受容史・研究史が堅牢なものでなければならぬはずだが、他の日記・私家集は比肩すべくもないはずである。

廣田收・久保田孝夫とともに『紫式部集』（以下『集』と略称することもある）の資料集・論文集の計二冊を編んだ際、ともに巻末の付録として「紫式部・紫式部集研究年表」を掲載した。『紫式部日記』（以下『日記』）『集』関連の論考は、第二次世界大戦以降にしほつても、また単著をひと数えるにしても、それぞれ七〇七編と一二三編、計八三〇編^{注1}にのぼる。『集』の注釈書に限定しても一〇冊。『源氏物語』がその

1 文学史上の『紫式部日記』『紫式部集』

冒頭「いづれの御時にか」の表現を借りた『伊勢集』にして、わずか二冊（関根ほか『伊勢集全釈』、秋山ほか『伊勢集全注釈』^{注2}）であるのに比べれば、質量の差は歴然としている。

『日記』と『集』は、『源氏物語』作者の作品という要素が強く作用し、『源氏』を解釈するために『日記』『集』が援用されたり、『日記』『集』を論ずるにも『源氏』が常に存在感をもって背後に君臨していたりする。いわば『源氏』の光輝の反射として両作品が意識されているということなのである。これは、文学史上当然の問題であり、批判されるべきことがらではない。『源氏』『日記』『集』の三者の論は今後とも密接に関連し合うであろうし、そうであらねばならぬだろう。

しかし、たとえば『集』をめぐる、

作品それ自体が研究対象であるというよりも、『源氏物語』作者の伝記資料として便利使いされつづけてきたこともこの作品を不幸にしてきた一因であったかもしれない。^{注3}

と、それまでの研究史を総括したのが二〇〇八年五月だった。『紫式部集大成』の刊行によって、研究者たちがその基礎資料にふれやすくなり、『集』も次のステージに乗るべき段階に至ったと判断した編者たちによって、さらに、

『紫式部集』は、かつては伝記研究の資料としてあつかわれるところに研究の端緒があった。本集をその束縛から解き放ち、ひとつの「作品」として対象化したいというのが、かねてから著者三人に共通する願いであった。^{注4}

と書かれたのが二〇一四年五月。右からわずかながら時日を経過して、大勢は変わらないものの、「伝記資料として便利使い」するという状況からはやや脱しつつあるかにも見える。

また『日記』は『日記』で、紫式部の思弁（たとえば「身」と「心」の問題）などで説かれたり、紫式部その人を論ずることに集中しがちではあったが、歴史学者の参入あるいは歴史的視点の導入によって、「記録」としての位相が明らかにされつつある。くり返しになるが、堅牢な研究史がその作品の文学史上の位置づけをより確固たらしめるものはずである。近年の研究動向を中心に『日記』と『集』の現状の問題点を検討したい。

二 『紫式部日記』成立論のさきにあるもの

『紫式部日記』は、いわゆる黒川本（宮内庁書陵部蔵〔黒一二七〕）の発見、諸注釈の底本への採用が定着して以来、テキストの問題は発生していない。国宝『紫式部日記絵巻』の詞書、^{注5}古代学協会蔵『絵巻』断簡などが鎌倉時代の本文を伝えるのみで、他の諸本は近世の写本でしかない。黒川本も、印記によれば、稲廬舎（日下田足穂、一八一四〜一八九〇）から黒川文庫（黒川真頼、一八二九〜一九〇六）に伝えられたもので、江戸後期も幕末にちかごろの写本でしかなかろう。最善本とされているが、誤写も多量にあり、諸本のなかでの相対的位置づけに過ぎない。

平安期から鎌倉期の「日記」の多くは古写本に恵まれず、古筆切も名物切として知られるもの以外はほとんどその存在を聞かないし、江戸期の中後期の写本に依拠せざるを得ないのが通例である。これは和歌・物語などに比べてみると歴然なのだが、写本の総量は格段に少なく、江戸時代を遡る写本に遭遇することはまず考えられない。古筆切も、和歌切にくらべて少ないといわれる物語切ですら、二〇〇、三〇〇